

オリンピックにおける『ブラックパワー・サリュート』
—1968年 メキシコオリンピックを手掛かりとして—

清水美咲

1、緒言

近代オリンピックの歴史がはらんできた政治性に着目する視点は、現在においてなんら斬新なものではない。近代オリンピックは古代オリンピックが持っていた世界規模の教育運動を復活させる動きといて始まったはずなのだが、20世紀の複雑な国際社会を通じて高度に政治的に利用されてきた。このようにオリンピックの政治性に注目しつつ、それをアメリカの黒人⁽¹⁾アスリートに引き付けて考えてみた場合、容易にひとつのイメージが浮かび上がるだろう。1968年メキシコオリンピックの200m走の表彰式において金メダルと銅メダルを獲得した、トミー・スミスとジョン・カーロスの二人の黒人アスリートは、胸に「USA」の文字が入ったトレーニングスーツに身を包みながら、両者はランニングシューズを脱ぎ、黒いソックス姿になった。そして、彼らは表彰台にのぼり国家が演奏されるとじっと地面を見つめ、無言の抗議を込めてそれぞれの黒手袋を着用した拳を天に突き上げた。これは、アメリカにおいて人種差別に晒されている黒人の苦境に対する抗議行動であった。

このように人種に跨る課題に迫ることは、現代的問題に示唆を与える可能性も秘めている。そうした意義から、この課題を追及したいと考えた。これが本研究の動機である。

ハリー・エドワーズは、1968年メキシコオリンピックに向けてアメリカ黒人アスリートによるボイコット運動を組織した人物として知られている。先行研究⁽²⁾において、このボイコット運動の過程や評価は、組織者であったエドワーズの役割も含めて詳細に検討されている。しかしながら、ボイコット運動以降のエドワーズに関しては、これまで十分に検証されてこなかったといえる。そこで本研究では、これらの先行研究を参照しつつ、メキシコオリンピックにおける『ブラックパワー・サリュート（サリュートとはロシア語で祝砲、花火を意味する）』を読み解くことを目的とする。

本研究が対象とする『ブラック・パワー』に関する調査研究には膨大な蓄積がある。まずは、それらの先行研究を一つ一つ洗い出し、丁寧に吟味する必要があるだ

ろう。その結果、本研究にとって、最も重要な先行研究としては、以下の2つの研究が挙げられる。

・森井博之、2006、『近代オリンピックの歴史に見る黒人差別問題 - 「抗議のこぶし」が果たした役割』、天理大学人権問題研究紀要 (9)。

・井田国敬、Harry Edwards、2001、『文書資料に見る「アメリカ体育スポーツ史」(7)：資料 (1) ニューヨーク・タイムズへのウォルト・フレジャー投稿記事「スポーツ選手ではなく医師について語る」(1977) (2) ハリー・エドワーズ著「黒人学者」から「人権のためのオリンピック運動：10年後の評価」(1978)』、大阪体育大学紀要 32。

そこで本研究 3. スポーツに見る『ブラック・パワー』では、ボイコット運動以降のエドワーズに見られる主要な論点を考察する。なぜなら、このような考察が今日的課題として「スポーツと人権」の関係を問う視角、つまりアメリカスポーツにおける人権問題への批判的な視角をもたらすと考えられるからである。

本研究が対象とするエドワーズの言説とオリンピックボイコット運動は、その性格上黒人とスポーツの関係において極めて限定的な言及になる。本研究においては、1967年から68年に行われたオリンピックボイコット運動の組織者であったエドワーズを中心にしながら、それに関わる黒人アスリートの発言における、アメリカスポーツと黒人の関係の理解といった観点に焦点を絞る。そのため、本研究は、アメリカにおける黒人アスリートの競技スポーツや体育における活動や業績を順を追って説明するものではない。あくまでも、ボイコット運動を基点として放射されるオリンピックおよびアメリカのスポーツと人種を対象とするものである。³⁾エドワーズの言説とオリンピックボイコット運動の展開を、『ブラック・パワー』という黒人解放運動の理念に焦点を合わせて取り上げた研究は、それほど多くはないが、このボイコット運動はアメリカスポーツ史上黒人アスリートによる政治運動の象徴的事象として頻繁に言及されている。先行研究において、OPHR (Olympic Project for Human Right) を当時のアメリカ国内および国際的な政治の流れの中で解釈しようと試みられており、活動経過は大部分網羅し研究されている。

ただしボイコット運動の中心人物であるエドワーズの主張内容に対して、60年代

後半の黒人解放運動の流れと関連付けて考察することは十分行われてはいない。そのため、60年代後半に盛んになった『ブラック・パワー』という思想的運動の関連からエドワーズの言説を集中的に考察し、それをもとにボイコット運動に関わる黒人アスリートを分析するという作業は、先行研究の取りこぼしを補う意味を持つ。そのため本研究は、この点を課題と設定した。

2、『ブラック・パワー』とはなにか

1963年8月28日に行われたワシントン大行進において、リンカーン記念堂前での有名な“I have a Dream”（私には夢がある）を含む演説が、マーティン・ルーサー・キング牧師によって行われた。人種差別の撤廃と人種の調和という高い理想を簡素な文体で訴えかけ広く共感を呼んだ。当該箇所の演説は即興にて行われたものといわれているが、その内容は高く評価され、1961年1月20日に就任したジョン・F・ケネディの大統領演説と並び20世紀のアメリカを代表する名演説として知られている。キングを先頭に行われたこれらの地道かつ積極的な運動の結果、アメリカ国内の世論も盛り上がりを見せ、ついにリンドン・B・ジョンソン政権下の1964年7月2日に公民権法（Civil Rights Act）が制定された。これにより、建国以来200年近くの間アメリカで施行されてきた法の上における人種差別が終わりを告げるようになった。ワシントンDCへの20万人デモで最高の盛り上がりを見せ国民権法を勝ち取った黒人解放運動は、後の激しい人民暴動に繋がっていく。1965年からの4年間に南部以外での主要都市で、黒人による人種暴動が夏ごとに頻発した。⁽⁴⁾なぜなら「国民権法は、黒人の希望を高めるには役立っていたが、北部における都市の環境は悪化しており、60年代中葉の法律は、その解決策を与えてはくれなかった。北部の都市における組織的な人種差別は、南部における立法的な人種差別より困難な状況として立ちだかった。スラム街における人種差別暴動の大部分は、計画されたものではなく、実際にあった苦しみを表すものであった。」⁽⁵⁾生前のマルコムXやその支持者であるエドワーズを代表とする過激派や極端派などへ黒人解放運動は内部分裂を起こしていくようになる。キングの非暴力的抵抗は次第に時代遅れなものになっていった。キング牧師はその要因を演説の中で以下の5つのように分析し、「すべての罪が黒人に帰せられるべきではない」と結論付けた。⁽⁶⁾

① 公民権法成立は黒人から見ると最初のステップでしかなかったが、白人社会は

「これで問題は片付いた」とゴールだと位置づけた。

- ② 深く根付いた差別意識は依然として教育や雇用の場に蔓延しており、黒人は階段の入り口には立てても頂点に上ってはいけない。
- ③ 差別意識により雇用の機会を奪われた黒人の失業問題は、白人に比べ深刻である。
- ④ ベトナム戦争により黒人は多数徴兵され、その多くは最前線でたたかわされている。彼らは母国で民主主義の恩恵を受けていないのに、民主主義を守るために戦争に狩り出されている。
- ⑤ 大都市ではスラム街に黒人が押し込められ、戦争のためにそのインフラ整備等の環境問題はないがしろにされている。

3、スポーツに見る『ブラック・パワー』

冒頭にも述べたように、エドワーズは1968年メキシコオリンピックへのボイコット運動を展開させようとしていた。これは黒人が白人社会で超階級的な連帯を構築させることが最大の目的であった。しかし同時にボイコット運動に対する反対運動が黒人内部から提出された。エドワーズによれば、「大会に参加することは個人的な事柄に属する問題であり、もし誰かが大会をボイコットするのならそれも同様であること、ボイコットは黒人により都合の良い住宅をもたらし職業を保証することにもならないこと、さらに人種間の理解を深めることにも繋がらないこと、そしてスポーツの領域は黒人を含め他の誰にあっても平等であること、などであった」⁽⁷⁾とされる。このスポーツにおける個人的な成功と政治的な黒人のための連帯をどのように対応させるかについては、OPHR内でも結論に至ることはなかった。結果ボイコット運動が実行されることはなかった。だが、このことが黒人アスリートに与えた影響は、非常に大きなものであったと考えられる。

メキシコオリンピックにおいて、黒人選手のトミー・スミスとジョン・カーロスが行った『ブラックパワー・サリュート』は、近代オリンピックの歴史において、最も有名な政治的行為として知られている。男子200m競争が終了した1968年10月17日夕刻、アメリカ人選手で19秒83の世界記録で優勝したトミー・スミス、オーストラリア人で20秒06の記録で2位のピーター・ノーマン、20秒10で3位につけたアメリカ人ジョン・カーロスのメダリスト三人はメダル授与のために表彰台に向かっ

た。二人の黒人選手は黒人の貧困を象徴するため、トレーニングシューズを履かずに黒いソックスを履いてメダルを受け取った。さらにスミスは黒人のプライドを象徴する黒いスカーフを首にまとい、カーロスはクー・クラックス・クランなどの白人至上主義団体によるリンチを受けた人々を祈念するためロザリオを身につけていた。一方でノーマンもほかの二人に同調、三人でOPHRのバッジを着用した。カーロスは当初身につける予定だった自分の黒の手袋を忘れたが、ノーマンがスミスの手袋を二人で分かち合うよう提案し、スミスが右の手袋を、カーロスが左手の手袋をつけることになった。そしてアメリカ国家が演奏され、星条旗が掲揚されている間中、スミスとカーロスは、視線を下に外し地面を見据え、頭を垂れ、高々と握り拳を突き上げた。会場の観客からは、同じアメリカ人からもブーイングが巻き起こりこの時の様子は世界中のニュースで取り上げられた。後にスミスは「もし私が勝利しただけなら、私はアメリカ黒人ではなく、一人のアメリカ人であるのです。しかし、仮にもし私が何か悪いことをすれば、たちまち皆は私をニグロ（ニグロイド）であると言い放つでしょう。私たちは黒人であり、黒人であることを誇りに思っています。アメリカ黒人は（将来）私たちが今夜したことが何だったのか理解することになるでしょう。」とこの時のことを語っている。

これらの行動は人種差別に抗議するデモンストレーションとしては確かに有効であったかもしれない。しかし、二人にはね返った代償はあまりに大きいものだった。国際オリンピック委員会（IOC）会長のアベリー・ブランデーは、オリンピックにおける内政問題に関する政治的パフォーマンスを行うことは「非政治的で国際的な場としてのオリンピック」という前提に相反すると考えていた。メダル授与式における彼らの示威行為に即座に反応して、ブランデーは表彰式の翌日、スミスとカーロスをアメリカ・ナショナルチームから除名、オリンピック村から追放すると命令を下した。アメリカオリンピック委員会はこれを一度は拒否したものの、IOCがアメリカ・ナショナルチーム全体の追放をちらつかせたため命令に応じ、スミスとカーロスは出場停止となり、オリンピックから追放されるに至った。IOC広報部は、二人の示威行為が「オリンピック精神の基本原則に対する計画的で暴力的な違反」であったと述べた。二人はアメリカオリンピック委員会より選手団から除名、そのうえ永久追放の処分を受けたのである。そして、「同じような行動をとった場合、オリンピック精神を踏みにじったものとみなし、厳しい処分を与える」という警告を、全選手に向け発し

た。それでも、スミスらに対する処分に抗議してか、ほかのアメリカの黒人選手たちも様々な行動をとり続けた。自ら選手団を脱退した五人、黒いストッキングを履いて表彰台に上がった走り幅跳びのボブ・ビーモンとラルフ・ボストン、黒いベレー帽をかぶり表彰を受けた4×400mリレーのメンバーたち…。彼らアメリカ黒人選手たちが競技では圧倒的な強さを見せていたため、そのデモンストレーションはなおさら、世界中の人々に大きな波紋を残した。

4、現在の『ブラック・パワー』

近年では、オリンピック憲章が謳う『人種、宗教、政治、性別、その他の理由に基づく国や個人の差別はいかなる形であれオリンピック・ムーブメントに属することは相容れない。』（オリンピズムの根本原則6）に則り、各国で人種差別を根絶しようとする運動がみられている。1976年のモントリオールオリンピック開催が決まった際に、地元のカナダ政府は、先住民族であるネイティブアメリカンに対する積極的な差別撤廃施策を実行した。また、2000年シドニーオリンピックを開催する前に、オーストラリア政府は、先住民族アボリジニに対する政策を転換させ、アボリジニの伝統と文化を守る施策を展開させている。このような時代の変化の中で、トミー・スミス、ジョン・カーロス両者の行動は認められたが、二人とともに抗議に参加した、オーストラリア人のピーター・ノーマンは当時の保守的な世間から批判され続け、オーストラリア記録保持者でありながら、2000年シドニーオリンピックに招待されることもなく、その6年後に亡くなった。

5、結論

今日、尾懸貢（2015）は、「世界5大陸の人たちが手を取り合い、そしてスポーツを通じて交流すべき“民族の祭典・オリンピック”において、差別的問題を浮き彫りにさせることがあってはなりません。しかし、現実にはアメリカだけでなく、ほかの国でも、陸上競技に限らず、様々なスポーツでも、問題となってきました。」と述べる。本研究で扱った内容は、メキシコオリンピックが始原というわけではなく、それ以前からあった現実である。

例えば、1936年のベルリン大会で独裁者のアドルフ・ヒトラーが、100m・200m・4×400mリレー・走り幅跳びの4種目で優勝した黒人のジョシー・オーエンズに

対し、「黒人がきらいだから」という理由だけでメダルの授与を断られたのは有名な話である。このようにどんなに活躍をしても、単に肌の色が黒いというだけで認めてもらえなかった時代が続いたのは現実である。現在では多くの公民権運動の活動家たちの努力により、差別問題は少しずつ和らいでいるようにも見えるが、依然として根強く残っている事実が本研究から明らかにすることが出来たであろう。オリンピック復興地目的として考察した場合、尾懸は「政治とオリンピックとの分離とともに、この人種差別をなくしてこそ、オリンピックは、本当の民族の祭典になりえるでしょう。」⁽⁸⁾とも述べている。前述のように差別的意識は徐々に改善されつつある。しかしながら、今もいまだに根絶するには至っていないのである。エドワーズによるオリンピックボイコット運動はその帰結として、オリンピックの表彰台でミスとカールロスによる象徴的な抗議行為を準備した。これは現在、人種的に成熟した社会へ移行するために重要な瞬間であったと考えることもできるだろう。そのみならず、アメリカとアフリカの黒人による連帯の可能性をスポーツの領域で示した点にも注目すべきである。『ブラック・パワー』の思想的運動を深く取り入れたエドワーズは、人種差別を隠蔽していたアメリカスポーツの騙し欺こうとする所を鋭く突いた。それは、実体的にオリンピックボイコット運動（1967-68）へと繋がり、その後、思想的に『黒人アスリートの反乱』（1969）において完成した。しかしながら、あまり急進的な思想であったため、当時の黒人アスリートから幅広く支持を得ることができなかった。しかし、エドワーズが60年代後半に提起した視点は、現在においても人種差別を解決し終えていないアメリカスポーツ社会において、積極的に評価できる象徴的な側面を含んでいた。よって、黒人の観点によるアメリカスポーツ史の再構築が主要な課題と認識される現在において、エドワーズの著作が語るものやボイコット運動に関わる時代の証言者に耳を傾ける必要があるだろう。本研究ではオリンピックにおける『ブラックパワー・サリュート』に関して、1968年のメキシコオリンピックを手掛かりとして検証してきた。ハリー・エドワーズの説に着目することで、それまでに実際の活動としてあまり表現されていなかった『黒人運動』の現在に焦点を合わせることができたことは一考に値する。しかしながら、根本的な解決策にはなっていないことが現実として見えてきたともいえるであろう。それに関しては。リオデジャネイロオリンピック、来るべき東京オリンピックに注視し、考えるべき事項となるだろう。それは今後の課題としたい。

-
- (1)本研究での黒人とは、差別的な意図を持たず、アフリカ系アメリカ人のことを指す。
- (2) 主な先行研究として以下のものが挙げられる。Amy Bass. (2002) *Not the Triumph but the Struggle: The 1968 Olympics and the Making of the Black Athletes*. Minneapolis: University of Minnesota Press.; Douglas Hartmann. (2003) *Race, Culture, and the Revolt of the Black Athlete: The 1968 Olympic Protests and their Aftermath*. Chicago: The University of Chicago Press. ; David K. Wiggins. (1997) “The Year of Awakening”: Black Athletes, Racial Unrest, and the Civil Rights Movement of 1968.” In *Glory Bound: Black Athletes in a White America*, N. Y.: Syracuse University Press, pp. 104-122.
- (3) 今野和志、『「ブラック・パワー」とアメリカ黒人アスリート—ハリー・エドワーズを中心として—』不昧堂出版、2011、552～555 ページ
- (4)有賀貞『アメリカ史概論』、東京大学出版社、1987、270 ページ
- (5) M. J. Heale. *The Sixties America: History, Politics and protest*, Edinburgh University Press, 2001 p. 123.
- (6)上坂昇、『キング牧師とマルコム X』、講談社、2013、96 ページ
- (7)今野和志、『「ブラック・パワー」とアメリカ黒人アスリート—ハリー・エドワーズを中心として—』不昧堂出版、2011、564、565 ページ
- (8)尾懸貢、「SportsClick」 < <http://www.sportsclick.jp> >、2015 年 10 月 14 日

キーワード

メキシコオリンピック、ブラック・パワー、人種差別、黒人アスリート、アメリカスポーツ、トミー・スミス、ジョン・カーロス、ハリー・エドワーズ、ボイコット運動、Olympic Project human Right

要約

近代オリンピックの歴史が内包してきた政治性に着目する視点は、現在においてなんら斬新なものではない。近代オリンピックは古代オリンピックが持っていた世界規模の教育運動を復活させる動きとして始まったはずなのだが、20世紀の複雑な国際社会を通じて高度に政治的に利用されてきた。このようなオリンピックの政治性に注目しつつ、それをアメリカの黒人アスリートに引き付けて考えた。そこで本研究では、オリンピックにおける『ブラックパワー・サリュート』に関して、1968年のメキシコオリンピックを手掛かりとして検証してきた。ハリー・エドワーズの説に着目することで、それまで実際の活動としてあまり表現されていなかった『黒人運動』の現在に焦点を合わせることが出来たことは一考に値する。彼の活動を起点として始まった『ブラックパワー・サリュート』は、人種的に成熟した社会へ移行するための重要な瞬間であったと考えることも出来るだろう。しかしながら、根本的な解決策にはなっていないことが現実として見えてきたともいえるであろう。それに関しては、リオデジャネイロオリンピック、来るべき東京オリンピックで注視し、考えるべき事項となるだろう。